昭和大学病院

クオリティインディケーター（QI）成果報告
〔呼吸器・アレルギー内科〕

指標名

思春期以降の成人食物アレルギーの外来診療実績

目標・ゴール

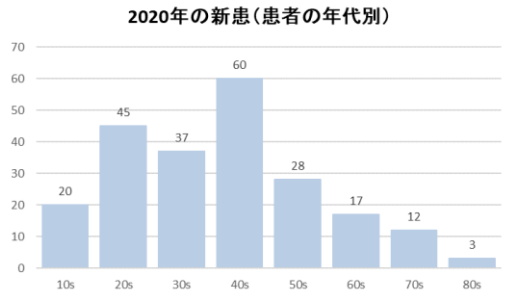
成人の食物アレルギーを専門的に診療可能な保険医療機関は少なく、周辺地域の難治性アレルギー疾患医療体制の均てん化を支援する。地域の１次医療機関でスクリーニングされた食物アレルギー患者の積極的な受け入れを目指す。とくに近年問題となっている「移行期（思春期～若年成年）」の患者の受け入れ先が不足しており、その受け皿として機能することを目指して学術活動や地域医療連携、教育活動を行う。

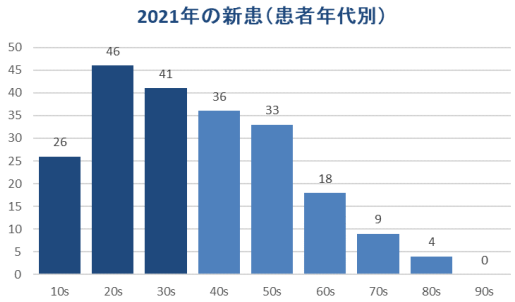
目標・ゴール達成による効果

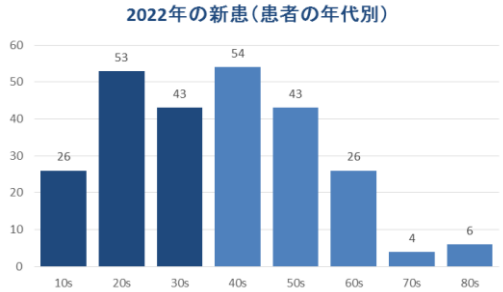
メディカルスタッフとの連携により生活指導、食事指導、エピペン（アドレナリン自己注射薬）の指導を行い、重篤なアレルギー症状の再燃を防ぐ。ガイドラインに基づいた正しい検査・治療・管理法を施行することで必要最小限の除去を患者に指導する。「移行期」の食物アレルギー患者を受け入れることで地域の住民の安心を高め、当院の信頼性を高める。地域だけでなく東京都全域で受診先に困窮する“アレルギー難民”を一人でも減らすように努める。

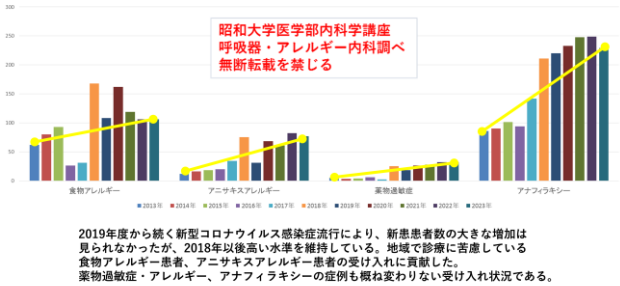
目標・ゴールに対する成果の状況

- １０歳代～８０歳代まで幅広い思春期～成人の食物アレルギー、食物関連アレルギー患者の新規で診療することが可能となった。
- 2018 年以後、恒常的に思春期～成人の食物アレルギーを一定水準以上の新規患者数を受け入れている。とくに「移行期」の新患が昨年までと同様に全新患の約半数を占めており、当科の診療活動の目的を達成しているものと考える。
- とくに従前の学術活動に加え、メディア露出や患者会への参画により、治療法が確立されていないアニサキスアレルギーの患者が日本を代表とするアニサキスアレルギーの専門施設として当院当科を選択して受診してくれた結果、数年間で新患が著増している。
- 地域の小児科医療機関との連携促進により小児科を“卒業”した患者の心強い受け皿になっていると自負している。









目標・ゴール達成度

☐S　：大幅に目標を上回って
☑A^{+}：目標を多少上回って達成
☐A　：目標を達成
☐B^{+}：目標を少し下回った
☐B　：目標を下回った
☐C　：目標を大幅に下回った
☐ー　：外的要因により継続困難となった。

目標・ゴール課題・改善策

・移行期（思春期～若年成人）の患者をシームレスに診療できる専門施設として、当院小児科ならびに近隣医療機関の小児科より食物アレルギー、アナフィラキシー原因精査の患者を受け入れることで新患の更なる増加が今後も期待できる。複数の食物アレルギー専門医師を育成することで、地域医療で困っている症例を幅広く受け入れられるようなキャパシティを確保する。現在は鈴木慎太郎、能條眞の2名の医師でフル稼働している。皮膚科もアレルギー専門診療が可能であり、協働し新患の受け入れを活性化する。

・当科のプライベートサイトで当科における食物アレルギー診療の積極性を示すことで、城南地区だけでなく都内、国内の広い地域から患者が受診しやすい情報提供の方法や環境を整備する。アニサキスアレルギーに関しては、その目的が既に達成している。非専門の医師向けに教科書や総説を著述し、また市民向けには学会公開講座やリカレントカレッジ、TV・新聞などのマスメディアで食物アレルギーやアナフィラキシー、アニサキスアレルギーの情報を教育・周知している。その活動を更に活発化する。

文責　責任者：鈴木慎太郎（呼吸器・アレルギー内科准教授）